盆栽町の形成過程と環境特性の持続要因*

The History of Bonsai Town and Its Sustaining Factors of Environmental Characteristic

増田 圭吾**　窪田 陽一***

By Keigo MASUDA, Yoichi KUBOTA

Today, many people live in suburbs because of easy access to the city. So, the environment in those areas have changed. The authors investigated the sustaining factors of environmental characteristics in Bonsai-village (now Bonsai-cho), one of the suburban residential area in Saitama city, Japan. Today, Bonsai-cho is the high-class residential area, but the environmental aggravation must be considered. First, the authors investigated the history of Bonsai-cho and then investigated the distribution of land use. The distribution of land use shows that recently apartments and parking lots (especially small type) have increased. On the other hand, the environment along the wide streets have comparatively sustained by the protection of trees and hedges, etc. The authors conclude one of the sustaining factors of environmental characteristic is residential high motivation including historical background for environment.

1　序論

(1)背景・目的

都市部に人口が集まる今、都市部郊外地域において住宅地が数多く形成されている。現在のように都市部に人口が集まり続ける限り、郊外住宅地の需要は衰えないであろう。特に近年になってその環境が大きく変化している地域があり、その環境がどのように持続・変化しているのかを調べることは非常に重要であると考える。本研究の目的はその郊外住宅地の環境がどのように持続していくかを調べ、評価することであり、昭和初期から環境のよい地域とされながら近年になって宅地化などにより環境が大きく変化していると考えられるさいたま市の盆栽町をケーススタディとしている。

(2)研究の構成

まずは盆栽村の歴史を文献調査により調べることで、現在までどのように盆栽村が形成されてきたのかを探った。しかし、盆栽村は環境の良い地域とされながら今までにその歴史をまとめた文献等は乏しく、本研究では開村当時を知る盆栽園関係者へのインタビューを行い、さらに盆栽園に残る資料から盆栽村の歴史をまとめた。その上で現在の盆栽町を現地調査し、近年の土地利用の変化を調べ、考察することで、どのようにその環境が持続・変化しているのかを探った。

*keyword：郊外住宅地、形成過程、盆栽村

**　　学士　埼玉大学工学部建設工学科

***正会員　工博　埼玉大学大学院教授理工学研究科環境制御工学専攻都市基盤工学研究室

(〒338-8570 さいたま市桜区下大久保 255)

2　立地特性

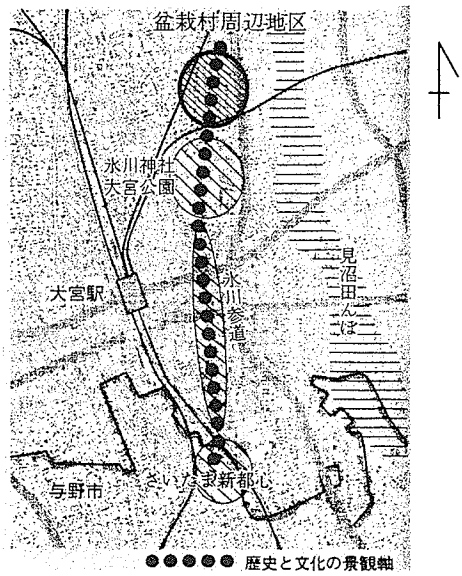


図-1　盆栽町周辺の位置関係

(原図：大宮市都市景観形成基本計画、大宮市、平成 11 年)

図-1 のように盆栽町は大宮駅北東に位置し、南に大宮公園、氷川神社、東には見沼たんぼがあり、大宮の都心を貫く緑と歴史文化のある軸の一部として存在していることがわかる。さらに、2 本の鉄道、1 本の幹線道路に囲まれ、盆栽町の通過交通が少ないことが挙げられる。

3　盆栽村の形成過程

(1)盆栽村の歴史

盆栽村は大きく4つの時期に区切ってとらえることができる。ここでは、その4期に分けて概要を示す。

a) 創設期：大正14年～昭和初期

関東大震災後、当時東京の本郷・駒込等の下町に住んでいた盆栽業者らが新たに盆栽の拠点地となるべく地域を探した。その結果、現在の地を選定し大正14年に盆栽村を創設した。住民規約をつくり、道路は碁盤目、道幅も当時県道の2倍とし、理想の盆栽村づくりを始める。現在のこの地を選んだ理由として、

①水・空気・土が盆栽に適していた。

②地主（小島善作代議士が主）が移住に対して積極的であった。

といった主に2つの理由が挙げられている。

また、盆栽村が出来るまでこの地は武蔵野の山林であり、地元の人々は開拓を願っていたのである。

ここで、理想の村づくりのための一つの核になった住民規約について以下に揚げる。

住民規約について

- ここに移住する人は、盆栽を10鉢以上もつこと。
- 門戸を開放し、いつでも、誰でも見られるようにしておくこと。
- 他人を見下ろし、日陰をつくるような2階屋はつくらないこと。
- 家の囲いはすべて生垣にすること。なお、この住民規約は戦前まで遵守されていた。さらに、住民規約の精神は現在における風致地区の指定、一部地域住民による建築協定に繋がっていると考えられる。

b) 第1黄金期：昭和10年前後～太平洋戦争前

盆栽園の数も30軒近くになり、昭和10年前後から政界人・著名人が盆栽村を訪れはじめた（盆栽の管理委託等含）。当時は盆栽を趣味とすることが江戸時代の武士階級や豪商達のように人間としての信頼度に繋がっていたため、政界人には愛好家が多くいた。

以上からこの時期に盆栽村が社会的地位を獲得し始め、それが村の存続、環境の維持に繋がっていたと考えられる。

c) 戦中・戦争直後：昭和16年頃～昭和20年代前半

兵役による人員不足、物資不足等により、盆栽園の維持が難しく閉園する園が多くなる。周りからの視線も冷たく、「こんな時局に盆栽など非国民だ」とののしられる。またこの頃から外部からの疎開者が入居し始めてきた。このように、戦争により盆栽村存続の危機が訪れたが、この後第2の黄金期を迎えることとなる。

なお、開村当時から大砂土村の一部として存在してた盆栽村は、昭和15年の大宮市市制施行により大宮市に含まれ、さらに昭和17年の区制廃止により、それまで単なる俗称でしかなかったのが盆栽町という行政上の正式な名称となった。

d）第2黄金期：高度経済成長期

戦後も文化人は関心をもって訪れていた。また、景気の上昇に伴い一般人の所得も増加。趣味として盆栽が人気となり、団体ツアーなどが東京から来るようになった。さらに、外国人も訪れはじめ、盆栽村が世界に知れ渡るようになる。

このような背景から、数自体は少ないが盆栽園の維持につながり、国際的にも盆栽の拠点地として地位を獲得し始め、村の環境の維持に繋がったのである。

(2)盆栽園の数の推移

ここでは、3(1)で示した4つの時期ごとに、盆栽園の数とその位置を示す。図中の黒丸(●)が盆栽園を表している。

注：以下の図はすべて1980年の地図を用いている。

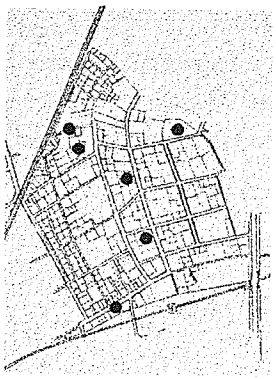


図-2　創設期

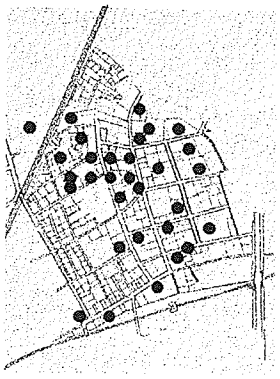


図-3　第1黄金期

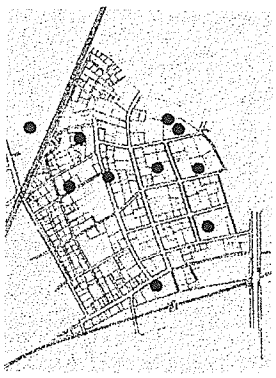


図-4　戦時・戦後直後

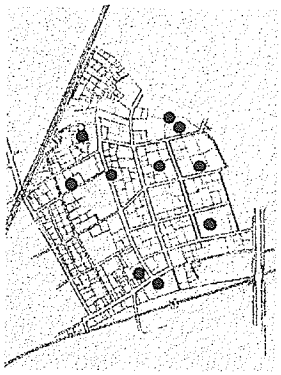


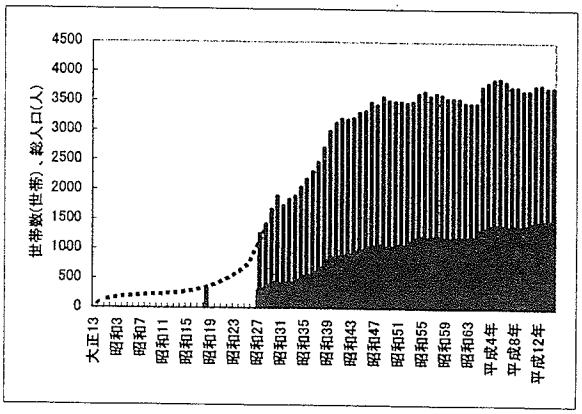
図-5　第2黄金期

（図-2、3、4、5の作成者：増田圭吾）

(3)人口・世帯数の推移

表-1に、開村当時から現在までの盆栽町における人口・世帯数をグラフ化したものを示す。なお、昭和27年以前は昭和18年を除き、データが無いため未記入とした。ただ、点線のような人口の推移が予想され、盆栽町は戦後大きく人口が増加したことがわかる。さらに、近年は人口が横ばいになっていることも挙げられる。平成元年頃に急に人口が増加しているが、これはマンション(集合住宅)の建設によるものと考えられる。

表-1　盆栽町(行政区域上)の人口・世帯数の推移



(住民基本台帳より作成、作成者：増田圭吾)

(4)盆栽村を支えた重要人物について

a) 清水利太郎　(清水瀞庵)

盆栽村創設に関わった第一人者であるが、東京市千駄木(東京都文京区)に生まれ、大正 12 年(1923)関東大震災に被災し、当時の神明町や団子坂の盆栽職人と共に、通称源太郎山と言われた大砂土村(大宮市)に移り、昭和 3 年会員 20 名で盆栽村を結成、初代組合長となった。太平洋戦争中は疎開者を受け入れ、戦後は盆栽村の中で数軒が占領軍に接収されたが、現在の盆栽村の基礎を築いた。享年 80 歳で没した。

清水利太郎が盆栽村に残した業績は大きく、開村から困難な開拓期であった 10 年が経たとき、村人の心にいっせいに湧きあがったものは、村づくりに貢献した清水利太郎翁への感謝の気持ちであった。
その心は今日の盆栽村の鎮守である稲荷神社の境内にそそり立つ紀功碑となって現れたのである。この除幕式は昭和 11 年 11 月盛大に執り行なわれた。

b) 加藤留吉 (2 代目加藤留吉)

明治 16 年(1883)1 月 4 日、山形県東村山郡鈴川村(現：山形市)に生まれる。10 代の時に、盆栽師を目指して上京、駒込神明町の初代加藤蔓青園に入門する。大正 12 年(1923)9 月 1 日、関東大震災で被災し、大正 14 年(1925)8 月、駒込神明町から大宮へ転住、清水利太郎(清大園)とともに盆栽村を創設する。

創設にあたっては、いろいろな地主、土地を借りている人たちとの間を取り持ち、清水利太郎を助けていた。清水利太郎が盆栽村の親分であり、加藤留吉はその助役として動いていた。

加藤留吉は信仰心の高い人であり、感謝の念の厚い人であった。新年早々の勅題の盆栽陳列会を自分一人で実施し、また盆栽の発展を期待して新聞記者を招き、説明をして新聞記事としたり、大宮駅に盆栽陳列所を設けて旅行者の目を楽しませたり身近な盆栽をもって社会奉仕の一部にと心がけていた。これらの仕事も自分の名前を表面に出さず、組合の仕事として終始したのであった。

c) 日下部金一郎

日下部金一郎は盆栽村創設にあたり、住民の家屋をほとんど建設した。日下部は清水利太郎と知り合いであり、それがきっかけになり、盆栽村創設に賛同したのである。愛知県出身。

(5)盆栽村を訪れた著名・有名人について

先に述べたように、盆栽村は昭和初期から政治家を含めて、著名・有名人が数多く訪れた地域である。「高級外車を見たければ帝国ホテルか盆栽村へ行け」といわれるほどであった。

具体的に人名を挙げると、埼玉県初の国賓であるリュプケ元西ドイツ大統領をはじめ、駐日大使のエドウィン・ライシャワー、文学者の志賀直哉、政治家では、吉田茂、佐藤栄作、岸信介、鳩山一郎などがおり、盆栽園(特に九霞園)には数多くの写真・署名が残されている。

4　盆栽町の環境特性の持続要因

(1)土地利用の推移

ここでは、特に大きな変化があったと考えられ、かつ詳細なデータが得られた過去 20 年間に関して、土地利用の変化を敷地ごとに捉えたものを示す。

土地利用の区分としては、盆栽園、緑地(公園含)、個人住宅、集合住宅、商業・文化施設、駐車場、空き地の 7 つである。

以下に用途別に 1980 年、1990 年、2000 年と年代ごとの推移を示す。なお、灰色に塗られている場所がその用途の敷地を示している。

a) 盆栽園の推移

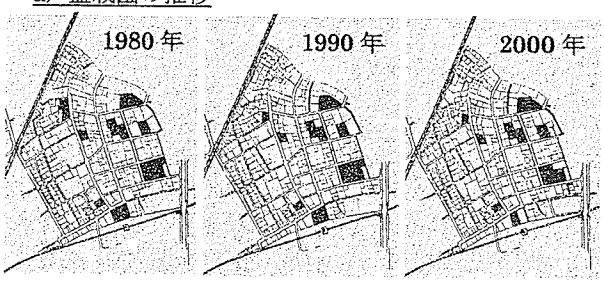


図-6　盆栽園の推移

数自体はほとんど変化していないが、いくつかの盆栽園で敷地の減少がみられる。これは相続税の問題が関係している。

b) 緑地(公園含)の推移

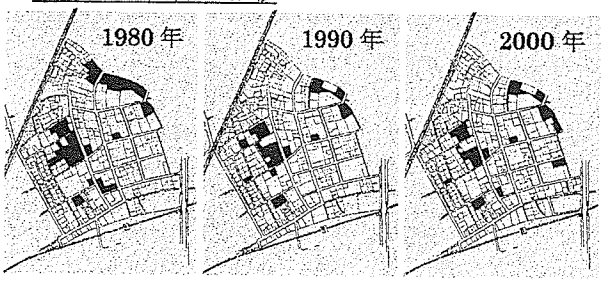


図-7　緑地の推移

緑地はやや減少しているが、あまり変化はみられない。盆栽園の跡地利用として公園となった敷地もある。

c) 個人住宅

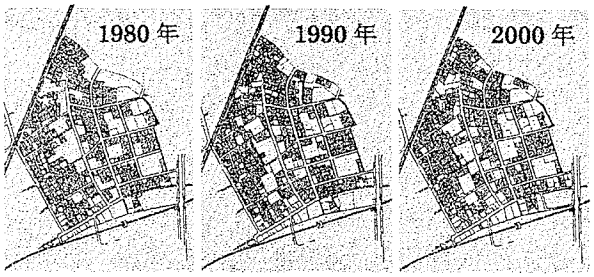


図-8　個人住宅の推移

盆栽町地域の半分以上が個人住宅で占められており、1980 年から 2000 年にかけて面積自体はあまり増加していないが、敷地が細分化されて利用されていることが分かる。

d) 集合住宅

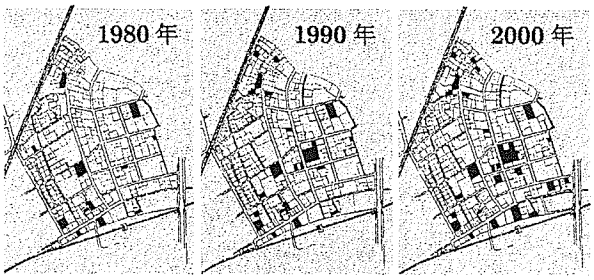


図-9　集合住宅の推移

1980 年から 2000 年にかけて数が増え、盆栽町に占める割合も多くなっている。また、小規模のアパートが増えていることがわかる。

e) 商業・文化施設

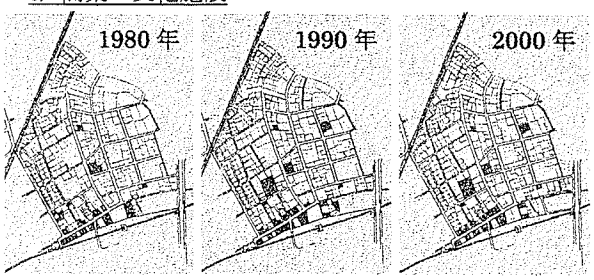


図-10　商業・文化施設の推移

盆栽町の南側、東武の打線大宮公園駅がそばにあり、人通りの多い場所に集中しており、年代を追っても数自体はほぼ不変である。漫画会館・盆彩四季の家などの文化施設は盆栽町の中心に位置している。

f) 駐車場

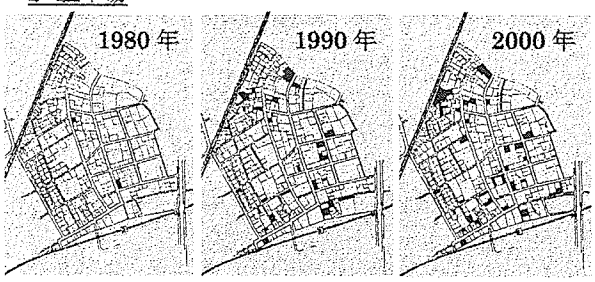


図-11　駐車場の推移

1980 年から 2000 年にかけて著しく増加している。特に小規模の駐車場が増加しており、さらには、集合住宅の側に点在している場合が多い。

g) 空き地

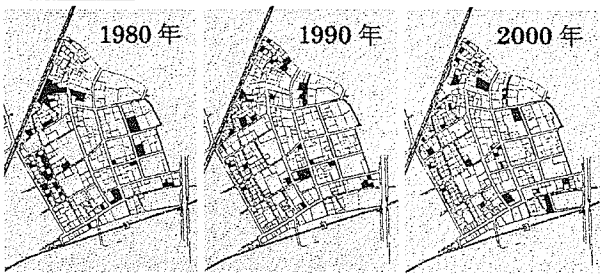


図-12　空き地の推移

空き地の面積はさほど変化してはいないが、敷地の細分化に伴い、小さい空き地が地域内に増加している傾向がある。

(図-6、7、8、9、10、11、12 の作成者：増田圭吾)

(2)環境の持続について

現地調査をふまえ、環境が維持されている場所、要因について列挙する。

・ 盆栽町を南北に横切る広幅員の道路沿いの環境が比較的持続している。

それら広幅員の道路にはけやき通り、もみじ通り、かえで通りなどがあり、それらの道沿いに樹木・生垣が多く残っている。

・コミュニティ道路

かえで通りはコミュニティ道路として、1980 年代に整備された。

・風致地区の指定

盆栽町の一部は風致地区の指定を受けており、建ぺい率、建物の高さの制限、木竹の伐採の規制、等がある。

・建築協定

環境を維持するために一部の地域住民の間で建築協定が結ばれている。

5　結論　～盆栽町における環境特性の持続要因とは～

物理的要因と心理的要因に分けて考えることができ、物理的な要因として、主に①風致地区の指定、②通過交通が少ない、③国内外に知られた観光地としての価値が挙げられる。

これに対して、心理的要因としては自発的な生垣の保存、庭木の手入れ等が挙げられる。特に歴史的背景を含め、環境の質が持続することによる、住民の環境への意識の持続が考えられる。

最後に、インタビューに快く応じてくださった蔓青園の加藤三郎さん、加藤初治さん、九霞園の村田勇さん、清香園の山田登美男さんに心よりお礼申し上げます。

参考文献

1)　『盆栽村・開村 80 周年記念誌』、大宮盆栽組合、2002 年

2)　『大宮盆栽村　五十年のあゆみ』、大宮盆栽組合、1973 年

3)　『大宮市都市景観形成基本計画』、大宮市、1999 年

4)　『ゼンリン住宅地図』、ゼンリン、1980 年、1985 年、1990 年、1995 年、2000 年、2002 年